戎百福 商店街夢話

これまでの100年、これからの100年。

老舗からチェーン店、大型店まで、多彩な店舗が調和しながら大阪ミナミらしい賑わいを生んできたなんば戎橋筋商店街。100年という蓄積の上へ、創意工夫ある努力と連帯を重ね、これからの100年へ――。

商店街・高度経済成長期 浪花の夜市に40万人もの人波

アーチ型のアーケード完成

大阪ミナミの戦後から、話を始めましょう。敗戦を一つの時代の区切りとして、街は槌音を響かせて復興へと歩み始めます。戎橋筋商店街は、無残な戦禍の記憶を活力に代えるほどのパワーを携えていました。

終戦からわずか10年、「もはや戦後ではない」ミナミの街は、神武景気のただ中にありました。昭和32年(1957)、難波に「ナンバ地下センター」が開業。千里の丘陵に広がるニュータウンが街開きした37年(1962)には、その対称軸にあった戎橋筋商店街にアーケードが完成します。街路をおおう真新しいアーチ型の屋根は、店主らの気概であり、来訪者らの憧憬の的でもありました。高度経済成長期を突き進むミナミの街には、消費エネルギーが渦を巻いていたのです。

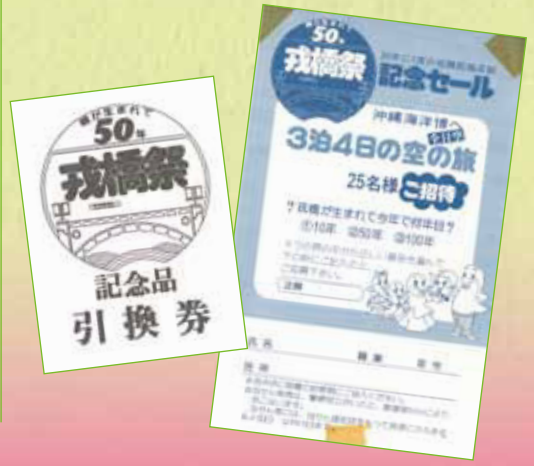
戎橋誕生50年を祝して

混乱と平穏とを繰り返しながら迎えた50年(1975)。明治11年(1878)に戎橋は木橋から鉄橋に架け替えられてほぼ1世紀。さらに、大正14年(1925)に鉄筋コンクリート製へと架け替えられて以来、半世紀の時が過ぎようとしていました。戎橋筋商店街のランドマークでもある戎橋誕生50周年を祝して、「橋が生まれて50年　戎橋祭」が盛大に行われます。

9月14日正午、戎橋南詰。音楽隊のファンファーレが高らかに鳴り響くと、大島靖大阪市長ら来賓を交えた記念式典が祭の開幕を告げます。人気漫才コンビの正司敏江・玲児やミス・インターナショナル、開催中の沖縄国際海洋博覧会からやって来たジャンボイルカも加わって、パレードやアトラクションが華やかに行われました。

戎橋祭オープニングセレモニー

これを機に「戎橋ファン」の拡大を図ろうと、商店街は次々とキャンペーン企画を繰り出します。目玉は「50年に1度」と銘打った記念セール。各店のスタッフは、PRワッペンを胸に輝かせて対応。商店街のイラストマップをデザインした記念スカーフが1万名のお客様にプレゼントされました。クイズの景品は3泊4日の沖縄海洋博へのご招待という豪華なものでした。



蛸まで売りに出されるナイト・バザール　昭和51年(1976)
(提供:読売新聞社)

商店街が祭り一色に

「戎橋祭」に先だって9月6日、13日に行われたイベントに「ナイト・バザール」がありました。通常営業を終えた商店街には、各店が趣向を凝らした露店を出店。

「さぁ、戎橋の夜店や!」「安いで!」

ネオンの輝きが鮮やかさを増すころ、あちこちから売り声が響きます。吸い寄せられるようにして人出が増え始め、押すな押すなの大盛況。併せて、全国区でブレイクする直前の笑福亭鶴瓶ら落語家や漫才師による「寄席」なども開催され、商店街は祭り一色に。夜遅くまで、熱気に包まれたのです。

ナイト・バザールが恒例行事へ

この大成功を受けて、「戎橋ナイト・バザール」は翌年以降も開催され、戎橋筋商店街の夏の恒例イベントへと発展。内容も回を重ねるごとに充実していきます。

中心になってプランを練り上げたのは、商店街の若手経営者の集まり「えびすばしぐるーぷ」。毎年2月ごろから打ち合わせを重ね、商戦に趣向を凝らしたのです。

屋台では、普段売らない商品を並べて格安料金で大サービスをするのがモットー。商店街の経営者自ら大阪中央卸売市場に出向いて仕入れてきた野菜や果物、鮮魚が並びます。

「10万円で仕入れて5万円で売る。バザールの相場でした」と、えびすばしぐるーぷの担当者が振り返ります。100円の革靴やシルクのワイシャツ生地が飛び出すなど、破格値の応酬でした。

「夏戎」で商売繁盛

他にも話題を集めた企画は、枚挙にいとまがありません。商店街の老舗100店が商品を提供しての「チャリティー・オークション」、10年前の値段そのままで売る「ひと昔プライスコーナー」など、浪速商人の心意気を示す内容が目白押し。お笑い芸人が街の中に出没する「ゲリラ寄席」や、落語、漫才、物まねなど、素人が自慢のかくし芸を競い合う「アマ・ボードビリアンコンテスト」など、演芸の街ならではのイベントも。

「夏戎」と題して、今宮戎神社からは「戎さん」が福娘を連れ立って来駕。「商売繁盛ササ持ってこい!」と、暑気よけ、世直し、不況祓に一役買って盛り上げました。

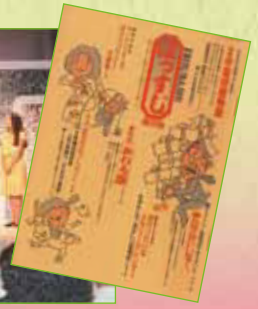
アマ・ボードビリアンコンテスト

若かりし頃の笑福亭鶴瓶さん

若手経営者のアイデア続々

毎年40万人もの人出で賑わった「戎橋ナイト・バザール」。浪速の夜市らしい情緒に溢れたイベントとして回を重ね、やがて「はっすじ夏まつり」へと変転していったのです。

昭和50年代、ナイト・バザールの盛り上がりで弾みのついたえびすばしぐるーぷの若手らは、続々とPR企画を繰り出します。商店街のPR誌『はっすじ』を創刊したのは53年(1978)。第1回「ミスはっすじクイーンコンテスト」を開催したのは55年(1980)。その勢いは戎橋筋商店街を核として、周辺エリアへと広がり大阪ミナミへの盛り上がりへと波及していきます。



第5回ミスはっすじクイーンコンテスト　昭和59年(1984)

商店街・昭和から平成へ　「なんば」変革への胎動

地域一丸となった「大なんば祭」

大阪キタと対照的な歴史、文化、魅力を育んできた大阪ミナミ、そして「なんば」。昭和60年代に入ると、関西国際空港の開港、湊町周辺の開発計画の具体化、大阪球場の移転と跡地の再開発、吉本興業のなんばグランド花月の新築開場など、いくつもの大プロジェクトが胎動を始めていました。

昭和62年(1987)、地下鉄御堂筋線なんば駅の新ホームが完成。これを「なんば」変革のスタートと位置づけ、活性化へ向けて行動を起こそうという動きが起こります。戎橋筋商店街、髙島屋、なんなんタウン、虹のまち、なんばCITYが参加して、「大なんば祭実行委員会」が発足。「ええなぁ、なんば　大なんば祭」と銘打ち、地域ぐるみのキャンペーンが展開されます。

商店会組織、法人化へ

時代は昭和から平成へ――。戎橋筋商店街を取り巻く状況は、めまぐるしさと多様化の度を深めつつありました。平成元年(1989)2月、商店街が位置する南区と東区の統合によって、中央区が誕生。4月には、消費税が導入されます。

大きなうねりとなって押し寄せてくる変革の波に乗るべく戎橋筋商店街は、商店会組織の法人化へ踏み切ります。同年、「戎橋筋商店街振興組合」を発足させ、新たに船出することになりました。これを機に、商店街組織の整備・体力の強化、地域環境の整備など、21世紀へ向けての飛躍に備えて基礎固めが始まります。

商店街振興組合創立総会　平成元年(1989)

アーケード・カラー舗装完成

平成7年(1995)には、2年8カ月という長期間に及ぶ大工事を経て、戎橋筋商店街のアーケード・カラー舗装が完成。時を同じくして、「はっすじ」から「えびすばし」の愛称変更に伴い、新しいロゴタイプとキャラクター「えびたん」がデビューします。

21世紀が幕を開けると、厳しい景況下にある中で、戎橋筋商店街はお客様とのより濃密な関係を構築するべく模索を続けていきます。13年(2001)には、「気持ちのええまち」「あいそのええまち」をアピールするため毎月10日を「えびたんの日」に決定。工夫を凝らしたサービスや接客、情報提供などを展開していきました。

アーケード・カラー舗装完成記念レセプション

完成記念パレード

平成の戎橋、渡り初め

平成19年(2007)、道頓堀川水辺整備事業に併せて改修工事が行われていた戎橋が完成。完成記念式典が行われ、82年ぶりに生まれ変わった街のシンボルの誕生を祝いました。平成の戎橋は、中央部分が広場のような円形のデザイン。道頓堀川沿いの遊歩道へ続くスロープが設けられています。今宮戎神社の福娘や商店街の経営者らが「祝平成の戎橋渡り初め」と書かれた横断幕を先頭に橋を渡り、完成を祝いました。

平成の戎橋は大きな話題を呼び、ランドマークとして新たな賑わいを生み出しました。戎橋筋商店街の活性化を促進させたことは間違いありません。

商店街・NEXT100　次の100年を目指して

激化するエリア間競争の中で

商店街の発祥は江戸時代ですが、「戎橋筋聯合会(れんごうかい)」が発足し組織を近代化したのは大正2(1913)年で、平成25年(2013)には100周年を迎えました。

それを機に「NEXT100」と銘打った100周年事業を展開、歴史文化のある「なんばの商店街」として戎橋筋らしさを再認識し、ロゴを新調、老舗の逸品を集めたご当地コラボ商品「戎福よせ(えびすふくよせ)」の販売、3歳児までを一時保育する社会貢献事業を立ち上げ、商店街体験博を交流型イベントとして定着させました。また、平成7年(1995)に建設したアーケードを大規模改修し全灯LED化を含む明るさ改善や防災機能の導入を行った結果、グッドデザイン賞を受賞しました。さらに商店街ルールを定めた「まちづくり協定」のうち性風俗など一部業種の制限に法的な裏付けをもたせるため「戎橋筋商店街建築協定」を締結しました。

100周年事業への取り組みは多くのメディアに注目されました。

朝日新聞 平成25年4月10日夕刊
毎日新聞4月3日朝刊
産経新聞3月29日朝刊

エリアぐるみで環境の改善や集客をする時代を迎え、近隣の商店街や大型店、鉄道事業者との協力関係の強化、さらに大阪府市一体となった都市魅力の発信にむけた官民連携も加速しました。梅田ではグランフロント大阪が開業、天王寺ではハルカスの開業や天王寺公園の改修が行われ、市内のエリア間でも集客を競い合う動きが。ミナミでは大阪のシンボルイヤーとなる平成27年(2015)道頓堀川開削400年記念イベントや南海なんば駅前を世界中の人が訪れたいと感じる、人中心の広場に改造するプロジェクトの事業化、もと精華小学校・精華幼稚園の跡地の再開発など新しい動きが加速しました。この頃、訪日客が急増し通行者の約3割にのぼり、国内客、訪日客がともに快適に楽しんでいただける環境づくりが課題となりました。

平成28年(2016)秋に開催した社会実験「なんばひろば改造計画」の様子

振興ビジョン2030の策定と推進

「2025年大阪・関西万博」の誘致、なにわ筋線と新難波駅の整備が令和13年(2031)に決定、平成20年(2008)に立案したまちづくり構想を新しい時代にむけたビジョンへと改訂しました。今宮戎の参道としていつの時代もにぎわいの場所として愛されてきたこのまちが、お客様の元気と豊かな暮らしにつながる道筋でありつづけるため「お客様とつくる繁盛するまち」を掲げ、歴史があり、大阪人に愛されその魅力で世界の人々が集い、なんばエリアの活性化に貢献する公共的な役割をもつ商店街を営業店、自家主の全員参加で築いていこうとするものです。そのため、多様な人材が参加する商店街組織づくり、なんばを拠点に回遊性を高めるプロジェクト、災害リスクや観光地化をふまえた次世代型商店街環境の創造、なんばエリア一体のプロモーションを展開していきます。

令和2年(2020)、新型コロナウィルスの影響を受けて通行者数は一時、例年の1割まで落ち込みました。新たな試練に直面し、振興ビジョンをふまえながら、繁華街にある商店街の価値を創造していかねばなりません。

※本誌で使用しているクレジット表記のない資料類で、当組合所蔵のもの以外はすべて個人所蔵